一年 12 回で聖書を読む会　第 2 年　第 2 回「ノアの洪水」

今日のポイント
・自然災害は神の裁きでしょうか。
・自然災害のとき、神は何をしていたのでしょうか。
・人は自然災害にどのように向き合うべきなのでしょうか。

【私たちの疑問】

1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災、さらに 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災は私たちの考え方や生き方に大きな影響を与えました。自然災害にさらされるとき、だれもが「そのとき神は何をしていたのか」という疑問を持ちます。また「これは神の裁きだ」と声高に言う人が必ずいるものですが、これは私たちにはなんとも納得できかねます。幼い子どもたちまでも犠牲になっていくのを見るとなおさらです。こういったことを考えるときに、必ず論じられる箇所が「ノアの洪水」です。今日はいつもより長くなりますが、創世記 6 章の 5 節から 9 章の 17 節までを朗読者の方に交代で読んでいただくことにしましょう。

【神の困惑】

ノアの一家しか生き残れなかったというほどの大洪水。その原因は神の決心にありました。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ」（6:5）がその決心です。神はここで窮地に追い込まれていることがわかります。２つの心痛む選択肢の中からどちらかを選択しなければならないという、いわゆる「究極の選択」です。それは、

(A)人の悪がますます増大するのを忍耐強く見続ける。そうするなら、やがて神とともに歩」（6:8）む人はいなくなり、人はたがいに悪の限りを尽くして傷つけ合い命を奪い合うことになります。愛なる神はこれを見ていることができません。

(B)これ以上の人の悪をとどめるために、すべての人と動物を滅ぼしてしまう。けれども神と愛し合うために造られた人がいないこともまた、愛なる神にとって諦めがたいことです。愛する相手を求めて神の心はうずくのです。

こうして二つの選択の間でどちらも選ぶことが出来ずに困惑する神は、「またし

ても」もっともリスクの高い第三の選択をします。ノアという神を愛する人に賭けたのです。「またしても」というのは、最初の人の創造のときと同じだからです。あのとき神は人に自由意思を与え、神とともに歩むか否かを人に選ばせました。あのとき人は神を拒みましたが、神はそれでもまだ懲りないでノアに賭けるのです。前回読んだように、カインそしてレメク（4:23。ノアの父親とは別人）と続く下向きの罪の渦巻きは、ノアの時代には世界全体を巻き込むまでになってしまいました。「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」（6:5-6）とある通りです。けれども、神は悔やみながらもさらなる後悔をもたらす可能性が高い選択をくり返しました。ノアとその子孫の中から神とともに歩む人々が現れることに賭けたのです。いつも人間が愛を選び取ることを期待し、そちらにかけ続ける。この点については、神には心変わりはありませんでした。

【悔いる神】

それにつけても、神が「悔やみ、心を痛められた」とは意表を衝かれる言葉です。「神はすべてを知っているのだから、だれがいつどんな罪を犯すかも知っているはずではないか。それならなぜ、人が罪を犯したからといって悔やんだり、心を痛めたりするのか。そんなことなら神は元々人など造らなければよかったのだ」と言う人がよくいます。けれどもプログラム通りの言葉を発音するロボットに愛はありません。愛することも愛さないこともできる私たちが、自分で神を選ぶときに愛が始まるのです。神は私たちがどちらを選ぶかを知りません。それは神が不完全だからではなく、そのような世界を造ることを神が選んだからです。神にとってはすべてを知っていることよりも、人と愛し合うことの方がたいせつだからです。そして神は大洪水の後、再び後悔ともとれる言葉を心の中で言います。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」（8:21）。ここには愛ゆえに（これ以上の悪をとどめるために）やむを得ず洪水を起こさなければならなかったにもかかわらず、そのことを悔い、心を痛める神の姿があります。愛とはそういうものです。正しい選択をしたからといって、その選択に伴う心の痛みが消えるわけではないのです。

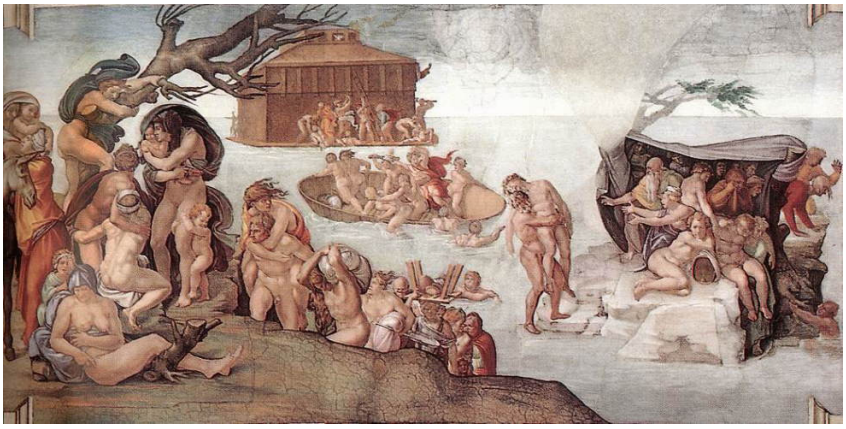
【自然災害は神の裁きか？】

自然災害は神の裁きでしょうか？答えはノーです。神が「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない」（9:11）と言ったからです。

神は「人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」（8:21）とあらためて罪が人に与えた影響の大きさを悲しみました。そして今後は滅ぼすのではなく、どこまでも寄り添うことを決意したのでした。神が大洪水まで、人の悪を知らなかったというわけではないでしょう。「人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ」には、大洪水を起こさなければならなかったことを悲しみ、そうしなければならなかった自らを慰めるような響きが感じ取れるようです。

そもそも裁きは、「だれがどういう理由で裁かれるのか」が明確でなければ意味を持ちません。すべての人が無差別にその被害を受けるわけですから、個人に対する裁きではあり得ません。国や世界全体に対する裁きだと見なす人もいますが、この場合も裁きの理由は明らかではありません。東日本大震災の被災地でも「神の裁き」だと声高に叫んだ人々がいたということですが、それはあり得ません。

さらに言うなら、ノアと同時代の人々は彼が箱船を造る様子を見ていたわけですから、神がノアに与えた警告を受け止めて、自分たちもノアをまねて箱船を造ることもできたはずです。ところが彼らは、そうしなかったために、自分から滅びを選びとってしまったと考えることは妥当なことでしょう。



ミケランジェロ　システィーナ礼拝堂「大洪水」

【神は何をしていたのか】

神が積極的に自然災害を起こしたのではないなら、そのとき神は何をしていたのか？ これは、悲しみの中にある人々がくり返さずにはいられない問いです。まず忘れてはならないことは、神が痛みを感じながら私たちの悲しみに寄り添っていることです。そして第二に、神は災害のただ中で被害を最小限にとどめるために私たちを通して苦闘するということです。東日本大震災のとき、自分は津波から逃れられないと知った祖母が、夫と障害を持つ孫娘に向かって「生きろよ、こっち見るな、後ろを振り向くな、がんばって生きろよ、バンザイ、バンザイ」と叫びながら呑み込まれていったというできごとも報じられました。

この気高い生き方は神が与えたものです。この祖母が神を信じていたかどうかにかかわらず、すべての良いものの源は神だからです。ほんの少しかもしれませんが、このできごとを通して神は世界を変えたのです。このような例を挙げるなら、とても数え切ることができないでしょう。神は自然災害と戦っています。人を通して、人と共に、創造の始まりからと同じように。

【私たちは自然災害にどのように向き合うべきか】

これまで聖書は why（なぜ）を語ると、くり返しお話ししてきました。けれども、聖書はすべての why に答えているわけではありません。たとえば、創世記３章で見た悪の起源もそうでした。なぜ神が悪の発生を許したかは語られていませんでした。同じように神が自然災害の発生を許す理由も聖書には直接は語られていません。聖書が語っているのは、私たちがそのときどのような道を選び、生きるべきであるのか、です。聖書からいくつかのことを見てみることにしましょう。

(1)　私たちは、神と共に自然災害に向き合うことを求められている

私たちには自由意思が与えられています。国や地域によっては、自然災害に乗じて略奪などが行われることもあります。反対に先ほどの例のように自分を与えることもできます。神は私たちに、神と共に自然災害に向き合うことを求めています。

(2)　私たちは科学の成果を用いて自然災害に向き合うべきである

神は世界を治めるように私たちにお命じになりました。私たちの知性もまた神から与えられた良きものですから、最大限に用いるべきもの。科学と聖書が対立するように考えるのは完全な誤りです。ノアの洪水で言うならノアが造るように命じられた箱船はおよそ長さ 134 メートル，幅 22 メートル，高さ 13 メートルの大きさ（6:15）でした。現代でも一つの家族がこんなものを造るのはたいへんなことです。神はノアに持てる限りの知識と技術を発揮することを求めたのです。私たちも科学の成果を駆使して、防災につとめ、予知し、避難し、救助し、復興に取り組むべきです。

(3)　私たちにはそれぞれ使命がある

私たちが今いるそれぞれのところに置かれていることも偶然ではありません。私たちにはそれぞれ、神が期待する使命があります。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記 1:28）とある通りです。今いるところが被災地であれ、そうでないにせよ、です。自分がするべきだと思ったことを、小さなことであってもできることから始めることです。災害への支援ばかりではなく、環境問題や社会問題などにも無関心でいてはならないでしょう。

コラム　神は自然災害に対して無力なのか

「神が愛であるなら、自然災害を防ごうとするはずである。それにもかかわらず自然災害が起こるのは、神が無力だからではないか」という疑問はいつの時代にも提出されてきました。これに答えるためには、以下の基本的な考察を押さえおく必要があります。

１実は、私たちの世界の破壊的な自然現象の多くは、それ自体としては悪ではなく中立である。それが人間に被害をもたらす場合のみ災害と呼ばれる。さらに言えば、それらは良いものだとさえ言うことができる。例えば、地震や火山は、惑星内部の圧力を逃がすことによって、惑星が吹き飛んで、すべてが破壊されることを防いでいる。

２神は被造物に「自律的法則性」と「自由性」を与えてそれを尊重する。自然災害はいくつもの被造物の中にあるそれぞれの法則性が複雑に絡み合って生じるから、神が直接コントロールしているわけではない。

３それにもかかわらず神は自然災害に直接介入することができる力を持っている。実際にどれほどの自然災害が神によってとどめられているかは私たちにはわからないし、私たちが経験している災害にどれだけ神の介入があったかもわからない。さらに私たちが経験した自然災害を仮に神がまったくとどめた場合、その自然エネルギーが代わりにどのように放出したかも私たちにはわからない。

聖書によるなら神は無力ではありません。けれども神が自然に与えた法則性を尊重する限り、その力には制限が加わります。神はその制限の中で可能な限りの愛を被造世界に注いでいるのです。そしていつか神はこの世界を再創造します。そのときこそ神の力が全面的に現れるのです。